聴解ストラテジーを取り入れたリスニング教材

立命館大学言語教育情報研究科修士２年　池田麻衣子
gr021039@gr.ritsumei.ac.jp

0.　はじめに

日本語学習者の増加に伴い、彼ら学習者の日本語教育へのニーズは多様化してきている。しかし、それら様々なニーズを、教科書ですべて網羅できるわけはない。そのため、教科書で満すことの出来ない学習者のニーズを補う副教材を、教師が作成する必要性が高まってきている。今回、ニーズ調査と目標言語調査を行い、学習者の声に基づいた教材を作成した。ニーズ調査からは、学習者はリスニングにおいて、現実の日本語使用場面に、教室での教授項目が転移しないと考えていることが明らかとなった。なぜ学習者はそのように考えているのかを、まず学習者がおかれている状況と教室活動から分析し、次に教室での教授項目を現実での聞き取りに転移させるにはどのようにすべきかを考察し、それらを踏まえ、学習者が遭遇するであろう日本語使用場面を選定し、目標言語調査に於いて学習者が特に困難だと感じる点に焦点をしぼり、教材作成を行った。

1.　ニーズ調査結果・分析

学習者へのニーズ調査をアンケートによって実施した。その結果、学習者は、4 技能のうちリスニング能力の項目の自信に対する自己評価が、５０パーセント以下と低く、現実場面での聞き取りができないという意見が聞かれた。なぜ現実場面の聞き取りができないと考えるのか、インタビュー調査を行った結果、学習者から寄せられたのは、「生教材を使用していないから、現実場面の聞き取りができない」という回答であった。

2.　なぜ教室での教授事項が現実での聞き取りに転移しないのか

この理由として「実際の場面に直面すると、学習者が練習していなかった多くの選択に圧倒され、教室でできた行動を再現することができなくなるのである」という（ネウストプニー, 1995, p. 22）の意見がある。この意見を基に、教室での活動や状況から学習者が練習していなかったものとは何かを分析した。

2.1. 学習者がおかれている状況

学習者がおかれている教室内と教室外での聞き取りの状況は、ネウストプニーの言う、「母語場面と接触場面」という定義を基に考えることができる。母語場面とは、話し手の全てが母語話者からなる場面である。接触場面とは、ある場面に非母語話者が参加し、母語場面にないような独特の特徴がある場面である。教室内での聞き取りは、学習者がインプットを理解できるよう用いられる、教師のティーチャートークなどに代表される接触場面であることが多い。教室外での聞き取りは、接触場面だけでなく母語場面であることが多いと考えられる。これらのことから、学習者の教室内の聞き取りは接触場面のことが多く、教室外で学習者が困難だと考える聞き取りは母語場面であるため、「練習していなかった多くの選択に圧倒され、教室でできた行動を再現することができなくなる」（ネウストプニー, 1995, p. 22）と考えられる。

2.2. 教室での活動

教室での活動としてのタスクを見るために、日本語教育で広く使用される初・中級聴解教材のいくつかを、どのようなタスクで構成されているかという視点から分析した。タスクには、基本的に

① 教育的配慮
② 言語学習を作り出すこと
③ 実生活

の３点いずれかに中心を置いた見方がある（岡崎, 1990）。この見方を通して教材を分析すると初・中級聴解教材は、既習の語彙・文法の復習を主とする 、 のタスクが中心で、 のタスクが少ない傾向であることがわかった。

学習者が困難と感じる母語場面での聞き取りのための練習となる のタスクが聴解教材には少ないので、このことからも、「練習していなかった多くの選択に圧倒され、教室でできた行動を再現することができなくなる」（ネウストプニー, 1995, p. 22）と考えられる。

3. 教室での教授事項が現実での聞き取りに転移するためには

「練習していなかった多くの選択に圧倒され、教室でできた行動を再現することができなくなる」ことを回避するためには、「練習だけでなく、インターアクション・ルールの本当の使用場面を直接教育課程の中に導入する必要がある」（ネウストプニー, 1995, p. 22）。これは、たとえ学習者が、初級学習者であり最初から本当の使用場面を導入できない場合でも「LPP（*正統的周辺参加）では学習をコントロールするのは実践へのアクセスであるとする。つまり、教材や教師の役割がそこにあるとすれば、学習をいかにホンモノの円熟した実践の本場（アリーナ）を当初からかいま見させて、そこへいける実感をもたせ、また、たとえごくごく周辺的であっても、そこにつながっているということがなんとなくわかるような、実践の手立てを講じてあげるということになる」（佐伯, 1998）、とあるように、実践の本場を当初から垣間見させて、何のために学んでいるのかという目的をはっきりさせることによって、回避することができる。つまり、実践の本場から切り離さないで学習することが大切なのである。しかし、これは、実践の本場（アリーナ）ごくごく周辺的なことなら何でもいいかと言うと、そうではない。それは、学習者にとって、”authenticity”でなければならない。言語教育における”authenticity”とは、「わざとゆっくり話した日本語（本文：英語）ではなく、ふつうの速さでの会話や、教科書用に書かれた文章でなく、実際の新聞などを素材に使うということではない」（朝尾, 2004）。それは、学習者が接触する母語場面の中で、学習者が、実現したいと考える行動が行われる母語場面を学習項目として設定することである。

これらのことから、教室での教授事項が現実での聞き取りに転移するためには、”authenticity”がなければならない、と考えられる。”authenticity”という点からタスクを考えると、前述の 3 種類のタスクの中の、 実生活の中で学ぶことが良いと考えられる。本来なら”authenticity”な場面＝実生活で学ぶこと、が良いと考えられるが、教室という限られた中で”authenticity”を取り込むには、実生活「的」タスク、つまりそれは、擬似的、シミュレーションにならざるを得ない。

4. 教材作成の具体的な展開

以上のことを踏まえて学習者にとっての”authenticity”を取り入れた教材を作成することとした。調査結果にあった、「いろいろなところを観光したいという」というニーズから、学習者が実生活で使用するだろう電車に乗るときに情報を得る、「アナウンス」を聞き取る教材を作成した。電車に乗って目的地まで行くためには、ホームでの聞き取りと電車の中での聞き取りが必要となる。それを現実場面に忠実に沿う形＝シミュレーションを可能にするマルチメディア教材を開発した。具体的な構成は以下の 4 つの部分から成っている。

（1）目的地への行き方を提示
（2）駅のホームの写真とともに、アナウンス（実際に駅でアナウンスされたものを録音したもの）を提示
（3）電車内の写真とともにアナウンス（実際の車内でのアナウンス）を提示
（4）目的地の映像

以上のような教材構成をもとに、授業運営におい

ては、コンピュータに向かって各自行うのではなく、できるだけクラス内で、アナウンスの聞き取りで難しい点、学習者自身が電車に乗ったときの経験、アナウンスをどう聞いているか、駅でのアナウンスのパターンなどを、教室で話し合いながら、母語場面を理解するのに個々の学習者がどのように聞いているか（ストラテジー）を認識・共有し、色々な気づきを持たせる授業を展開したいと考える。またこの教材を使用することによって、「日本語教室が個々の学習者にとっての実践の場への足場となるのではないかと考える」（西口, 2002）。

5. 駅でのアナウンス素材選定理由と目的地選定理由

5.1. 駅でのアナウンス素材選定理由

学習者が使用すると考えられる京都市内の４つの鉄道（ＪＲ、阪急、京阪、京都市営地下鉄）にて電車案内のアナウンスや駅周辺の状況を調査し、学習者が特に困難と感じる母語場面での聞き取りの情報に遭遇する、阪急電鉄と京阪電鉄のアナウンスを教材化することにした。

目標言語調査結果（2003 年 12 月実地）

＜JR＞
アナウンス：日本語、英語両方あり
電光掲示：日本語・英語
＜京都市営地下鉄＞
アナウンス：日本語、英語両方あり
電光掲示：日本語・英語
＜阪急＞
アナウンス：英語放送なし
電光掲示：行き先のみ英語あり
＜京阪＞
アナウンス：英語放送なし
電光掲示：数箇所、英語の掲示板あり

5.2. 目的地選定理由

「ルミナリエ」を選定した理由は、学習者へのニーズ調査から、日本の同じ年齢層の人が話題とするイベントについて知りたいというニーズがあることから、日本の若者が多数行くだろう目的地とした。

6. 学習者の教材に対する反応

現段階では、学習者の教材へのフィードバックは得られていないが、アンケートなどを実施し評価を得る予定である。また現場にて教材を使用する機会があるならば、実際にこの教材を使用しどういった学習が展開されたかを観察・学習者からの教材への評価、教材意図どおりに学習者が学べたかを調査したいと考える。それらのフィードバックをもとに、教材を改善し、学習者のニーズをより反映させたい。

7. まとめ

学習者へのニーズ分析から、彼らがリスニングに対して抱く問題が明らかになった。問題の原因、解決策について考察し、これらを踏まえ、教材作成を行った。

先ず、学習者が実際に遭遇すると考えられる母語場面をニーズ分析によって選定しその中でも困難と感じるであろう場面を教材に取り入れた。作成した教材を使用することによって、日本語教室に”authenticity”を取り込み、実践への参加の機会を提供することができるのではないかと考える。この教材が教室に持ち込まれることによって、実践への「足場」が生まれることを期待している。実践の場を教室に持ち込んだものとしては、岡崎(2002）の定住者対象の日本語教室での活動や、ボランティアを参加させ接触場面を教室に設定したもの、池上（2002）の「交流実習」日本人を招いて双方に学びあうもの、学習環境を教室外に広げて学習者が実際に行動を行う行動達成などを通して、自己実現を目指すもの等がある。だが、池上（2002）の学習環境を教室外に広げる行動達成、例えば、買い物に行く、

などについては、事前準備など教師の負担を考えると何度も簡単に実施することできない。

今回作成したオンラインマルチメディア教材は、教室に”authenticity”を取り入れる際生じる教師の負担も軽減でき、web 上にあることより、教室でできなかった学習者も、個別に、出来るまで練習することができる点が利点と考える。コンピュータを使用しシミュレーションを導入することによって、教室という制限の幅を広くできると考える。このような利点を考えると、今後”authenticity”を取り込んだ教材が多く開発される必要があると考える。

参考文献

朝尾　幸次郎 (2003) 「教えない」という仕事もある. 『英語教育』, 52 (2), 11-13.

朝尾　幸次郎 (2004)「言語教育における authenticity とは」メビウス月例研究会第 109 回例会レジメ

池上　摩希子 (2002) 「体験型学習の意味と方法」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』 （細川英雄編） 東京：凡人社

石黒　昭博 (1994)「Authentic な教材の可能性」『現代英語教育』, 30 (12), 8-10.

岡崎　眸 (1987) 「第二言語習得の促進を目指す聴解指導-Comprehensible input-」 『日本語教育』64, 86-97.

岡崎　眸 (2002) 「内容重視の日本語教育」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』（細川英雄編） 東京：凡人社

岡崎　敏雄・岡崎　眸 (1990) 『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』日本語教育学会編 東京：凡人社

小川　邦彦 (1994) 「Authentic な教材-その選び方・使い方」『現代英語教育』, 30 (12), 14-16.

川崎　清 (1997) 「Authenticity の意味とその基準」『文京女子大学研究論集』, 7 (1), 23-32.

ジーン・レイブ＆エチエンヌ・ウエンガー著 佐伯胖訳 (1993） 『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』東京：産業図書

J.V. ネウストプニー (1995) 『新しい日本語教育のために』東京：大修館書店

武井　昭江 (2002） 『英語リスニング論：聞く力と指導を科学する』 東京：桐原書店

竹内　理 (1998） 「コンピュータ・ネットワーク利用の外国語教育：その理論的背景と問題点」『語学ラボラトリー学会関西支部研究集録』, 7, 29-48.

竹内　理 (近刊) メディアの利用と第二言語習得（第14 章）『入門セミナー：最新の第二言語習得研究と英語教育（仮題）』 小池生夫（監修）東京：大修館書店

田中　正道 (1994) 「教科書教材と Authenticity」『現代英語教育』, 30 (12), 11-13.

西口　光一 (1999） 「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」 『日本語教育』100, 7-18.

西口　光一 (2001) 「状況的学習論の視点」 『日本語教育学を学ぶ人のために』 (青木　直子; 尾崎明人; 土岐　哲, 編） 京都：世界思想社

西口　光一 (2002） 「日本語教師のための状況的学習論入門」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』 （細川英雄編） 東京：凡人社

松田　憲・津熊　良政 (2001) 「学習者中心、コンテント・ベース教育と CALL の統合 -2000 年度 CALL 教材開発の理論と実践-」『立命館文学』, 567, 527-564.

松田　憲, 他 (1995)「英語 CAI 教材（Campus Life at UBC）の開発」 『立命館言語文化研究』, 7 (2), 1-15.

分析教材

川口　さち子, 他 (2003)『上級の力をつける聴解ストラテジー上・下』 東京：凡人社

小林　典子, 他 (1995)『耳で学ぶ日本語わくわく文法リスニング 99』 東京：凡人社

林　さと子、元橋　富士子 (2003) 『にほんごきいてはなして：24Tasks for Basic Modern Japanese1.2』東京：The Japan Times

文化外国語専門学校 (1994) 『楽しく聞こう　・　』 東京：凡人社

宮城　幸枝、三井　昭子、牧野　恵子 (1998) 『毎日の聞き取り 50 日：初級編上・下』 東京：凡人社